幕末明治の写真師列伝　第百一回　宮下欽　その二十三

武田斐三郎は砲兵大尉ブリュネの助言を受けながら、ナポレオン三世から将軍徳川慶喜に贈呈された四斤砲（通称ナポレオン砲）の国産化を図り、苦心の結果、慶応3年（1867）の初めにはその国産化に成功している。そのナポレオン砲の量産化の計画をしている時に、幕府と薩長の間で鳥羽伏見の戦いが起こった。武田斐三郎は幕臣とはいえ、この内乱には直接立ち会ったわけでもなく、どちらかといえば無関心であった。しかし砲術の第一人者である武田斐三郎のことを佐幕派の者はほっておいてはくれない。武田斐三郎の奮起を促すも、武田斐三郎が何もしないことに憤激して、ついには武田斐三郎が住んでいた下谷仲御徒町の屋敷を襲撃した。襲ったのは幕府伝習隊隊長、斎藤速水などである。この時は武田斐三郎の妻、高子（再婚した2番目の妻）の機転もあって、関口製造所から運んできてあった長持の中に隠れ、その蓋に「危険物、取扱注意」と書いてあるのを、高子は斎藤速水らに示し、「この貼紙がお目に止まりませんか、これは関口の火薬庫から届いたばかりで、中には火薬が詰まっています。万一蓋を開けるはずみに爆発したら木端みじんになりますよ」と脅したので、斎藤速水ら暴徒は退散したという。これで一応難を逃れた武田斐三郎は、暴徒の再来を恐れて、隣人高橋某の勧めもあって、幕府に御役御免を願い出るとともに、竹中庄蔵と変名して、高子の実家大塚市二郎の家へ身を隠すこととなり、その後、さらに松代藩邸へ移ることになった。この松代藩邸滞在中に藩主真田信濃守幸教から、武田斐三郎を松代藩の軍政改革の指導者として招き入れたいとなったのである。武田斐三郎はまだ幕臣であったため、幕府の許可も必要ではあったが、それも徳川家より無事に受諾されて、慶応4年（1868）12月に江戸を出て松代へ行くこととなった。これにより戊辰戦争から帰藩した宮下欽次郎は、松代藩士官学校教授、武田斐三郎の門人の一人となるのであった。

明治3年（1870）11月23日、更級郡上山田村に「石代納金十両に籾四俵半相場」、同日の夜に「藩札[明治2年（1869）上田騒動の波及を恐れて、二分金回収を目的に発行した済急手形と商法社手形]は画面の二割五分引き通用」との御触が届いた。村役人はこの御触を翌24日に村中に伝える。

この当時、上山田村では宮原喜右衛門により弥勒寺地籍山地の開発が行われていて、喜右衛門は工事完了の2日前に藩札でこの工事の労賃を支払っていた。ところがこの藩札が画面の二割五分引きという御触があったことで、これは労賃が二割五分引きの減額と等しくなり、開発事業者と農民労働者の困惑と混乱を招くこととなった。そこで農民たちは全員で前惣代宅へ行き、藩庁への嘆願を依頼することにした。その返事がなかなか来ないことから、農民たちは集まって騒ぎ出し、ついには大一揆のような騒動となってしまった。これが次第に大きな騒動となって松代周辺の村々や川中島平、高井郡から城下に乱入するという事態になる。およそ3000人もの群衆は25日夜から26日にかけて、放火、富商の打ちこわしと乱暴を続けた。そしてこの時の騒擾で、武田斐三郎の邸宅も火災で焼けてしまった。この一揆を午札騒動という。これは商法社手形に印刷してあったキリンの絵の印刷技術が悪かったために馬に見えたので、商法社手形を午札と通称していたからである。

この午札騒動の結果、藩知事真田幸民は謹慎15日、大参事・真田桜山、権大参事・高野広馬は閉門35日、藩政当事者の大熊薫、岩崎懋は謹慎20日を命じられることとなった。

一方、午札騒動の関係者の検挙は12月26日より翌明治4年（1871）末まで行われ、検挙630人、投獄400人余りにも及んだ。午札騒動の詳細については、上條宏之、堀内泰、武田武ほか著『街道を駆けた信州明治維新』（柏企画、2011年）、小松芳郎監修『幕末の信州～近代への序章～』（郷土出版社、2008年）、長野県編『長野県史　通史編　第七巻近代一』（長野県史刊行会、1988年）などをご覧頂きたい。またこの午札騒動のため、松代藩士官学校も12月に閉校となり、武田斐三郎は東京の松代藩邸に戻ることになる。この時、門人の宮下知幹、井上操、宮島春松、富岡定恭、牧野毅なども武田斐三郎に同行して東京へ行っている。士官学校が閉校になり、武田斐三郎も松代を去った後は明治4年（1871）1月、改めて文武学校内に西洋兵学寮士官学校が設けられたが、同年（1871）7月に松代藩が廃藩となり、これと同時に廃校となってしまった。武田斐三郎は東京の松代藩邸に寄寓していたが、やがて桜田門外旧彦根藩邸（井伊邸）に1か月ほど住んだ後、下谷竹町二十八番地に移った。この時、広く有用な人材を求めて登用していた明治政府は、砲術の第一人者である武田斐三郎を見落とさず、明治4年（1871）4月28日、兵部省出仕を命じた。そして武田斐三郎に築造掛を命じる。同年（1871）7月28日、陸軍少佐兼兵部権少丞に任じられ、砲兵局兼築造掛分課正七位に叙せられる。同年（1871）8月15日、兵部省七等出仕、同年（1871）12月14日、陸軍中佐に任じられる。

このように武田斐三郎は東京の兵部省で目覚ましい出世を遂げてゆくのであるが、この武田斐三郎を頼って松代藩士たちも続々と東京に出てくるのである。宮下欽次郎の長兄、大嶋直之進（後の春水）もそんな一人で、明治4年（1871）9月11日、兵部省出仕、少尉に任じられている。同じく宮下欽次郎は同4年（1871）9月11日、兵部省出仕、二等軍曹に任じられた。しかしながら宮下欽次郎は二等軍曹という低い軍籍からの再出発である。軍曹は下士官で、その下は伍長、一等兵卒、二等兵卒しかない。また二等軍曹の上にはさらに一等軍曹、権曹長、曹長とある。このことが、後に宮下欽次郎が軍籍を離れた原因の一つであると思われるのである。

（森重和雄）

【参考資料】

長野市松代小学校　松代文武学校編集委員会編『松代文武学校』（松代藩文化施設管理事務所、昭和50年）

『一般教育部論集 第8号』（創価大学 、1984年）所収 、田中貞夫「松代藩兵制士官学校関係資料(其の一)」

『一般教育部論集 第9号』（創価大学 、1984年）所収 、田中貞夫「松代藩兵制士官学校関係資料(其の二)」

大平喜間多 編纂『松代町史』下巻（臨川書店、1986年）

国立史料館編『真田家家中明細書』（東京大学出版会、1986年）

長野県編『長野県史　通史編　第七巻近代一』（長野県史刊行会、昭和63年）

小松芳郎監修『幕末の信州～近代への序章～』（郷土出版社、2008年）

上條宏之、堀内泰、武田武ほか著『街道を駆けた信州明治維新』（柏企画、2011年）